



# 多様な人々のニーズに配慮できる 減災教育プランと教材開発



## ライフデザインイノベーション研究会

### 1 本研究の特徴

高校家庭科において、「共生・人の多様性」理解、**ユニバーサルデザイン(以下UD)**視点の育成をした上で、**減災教育プランの実践**を通し、安心・安全でより豊かな生活が営める市民、持続可能な社会を実現できる生活主体者の育成をめざす。

(UD: Universal Design )



### 2 減災教育プランで期待される効果

1. 自然災害において想定外は起こりうる  
ことの理解と、防災意識の高揚
2. 避難所生活の実態理解と、減災意識の  
高揚
3. 高校生が避難所運営・支援者となる  
(なれる)可能性の高まり

### 3 新学習指導要領との関連

#### ■改訂の基本方針（2018.3）

- 知識及び技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成とのバランスを重視

#### ■家庭科改訂の趣旨（2018.7）

具体的な改善事項 ② ii) 教育内容の見直し

- 今後の社会を担う子供たちには、(中略)持続可能な社会の構築等の現代的な課題を適切に解決できる能力が求められている。

### 4 UD視点の育成と減災教育プラン

授業題材	育てたい視点 /コンセプト	減災教育との関わり・減災教育のねらい
UD学習手引書による授業	共生・人の多様性の理解 (UD視点)	世の中には特別なニーズをもつ様々な人がいる。自分もその当事者になる可能性がある。ということの理解が基本にある。 この視点が育っていないと、共生意識は生まれず、災害発生時の助け合いは実現しない。
UD学習手引書による授業で生徒の共生・人の多様性の視点を育てた後、発展的な授業として「減災教育プラン」を実施する。		
減災教育プランの実践	多様な人々のニーズに配慮できる 支援者育成の視点	・ 関連死の原因について理解する。 ・ 関連死を出さないためにはどうしたらよいかお互いに話し合いながら、避難所をデザインする。 ・ 万一災害が発生し、避難所に行かねばならない状況になった時、避難所で支援する態に立つことができるための第一歩をめざす。

### 5 UD学習－共生・人の多様性の理解

#### 「UDって何？」

##### ① 様々な生活用品

プロポーション・文字・色・書体など「さりげない配慮」のチェック

##### ② UDは誰のためのデザイン？

私も含めた多様な人々が対象

見る・ふれる・感じる



持ちやすさ、注ぎやすさに注目



文字の色、文字間隔、書体に注目

### 5 UD学習－共生社会の実現に向けて

#### 「社会環境とUD」

誰にとって使いやすいものかを視覚教材から考える



誰でもトイレ(新幹線)/オストメイトにも配慮



新型自動販売機

### 6 減災教育プラン



時間	項目	ねらい
1	防災・減災について考えよう	
(1) 導入		いま、自分の住んでいる家にこれからもずっと住み続けるとして、一生安心・安全な場所となるかを考えてみる。日本が地震大国であることをデータで再確認するとともに、「想定外」のことは起こり得ることを理解する。
(2) 「防災」視点だけでは生き延びられない		自分の家で震災に備えていることを振り返る。いま、震度5~6規模の地震があった時、自分の家には誰がいるか、いない場合、その人たちはどこにいるかを考える。
(3) 東日本大震災後、避難所で明らかになったこと		避難所の実態を知る。何が問題になったかを知る。
(4) 避難所における関連死の実態		「関連死」の実態を知る。
(5) なぜ人は避難所で命を落とすのか		人が生き延びるためには、どのような要素・条件(ヒト・モノ・コト)が必要なのかを考える。
(6) 「大人に支援してもらおう」側から「支援する」側へ		避難所運営は誰が行うのかを理解する。生徒や学生が支援者になる可能性について理解する。
(7) 避難してくる「多様な人々」		10ケースの人たちが避難所生活でどのような支援が必要になるか、具体的に考える。グループで支援策を交流する。
	振り返り・感想記述	
2	安心・安全な避難所をデザインしてみよう	グループで考えた支援策を基に、避難所をデザインする。各グループがどこに配慮したかを発表する(クラスで交流する)。
3	振り返り・感想記述	

新学習指導要領との関連性・どの学習領域からでも実践可能

平成30年度の自然災害・情報加筆

熊本国府高校サッカー部員が避難所運営・事例を紹介

グループ交流時の教員役割事例を掲載

#### 「避難してくる多様な人々」を想定・発表



家がなくなった人、高齢者、体が不自由な人、病気の人、一人暮らしで不安な人

外国人、観光客、妊婦、子ども・乳幼児、けがをした人、アレルギーのある人...



**「防災」視点だけでは生き延びられない  
避難所における災害関連死の実態を知る**

関連死の原因	延子・避難者	罹災者	合計	割合	推計
1 病院の機能停止による初期治療の遅れ	39名	51名	90名	4.6%	153名
2 病院の機能停止による既往症の増悪	97名	186名	283名	14.5%	483名
3 交通事情等による初期治療の遅れ	13名	4名	17名	0.9%	30名
4 避難所等へ向かう途中の肉体・精神的疲労	21名	380名	401名	20.7%	689名
5 避難所等における生活の肉体・精神的疲労	205名	433名	638名	32.7%	1089名
6 地震・津波のストレスによる肉体・精神的負担	112名	38名	150名	7.7%	256名
7 原発事故のストレスによる肉体・精神的負担	1名	33名	34名	1.7%	57名
8 救助・救護活動等の義務	1名	0名	1名	0.05%	2名
9 多量の塵灰の吸引	0名	0名	0名	0%	0名
10 その他	110名	105名	215名	11.0%	386名
11 不明	65名	55名	121名	6.2%	206名
12 死者数	684名	1,286名	1,970名	100%	3,331名

復興庁「東日本大震災における震災関連死に陥る原因等（基礎的数値）」について（未定稿）（2012.8.21発表）をもとに高橋 伸哉、「統計」欄は、「割合」欄をもとに、復興庁「東日本大震災における震災関連死の死者数（都道府県別）」（2015.5.31現在）の施設別死者数（山形、茨城、埼玉、千葉、東京、神奈川県、長野を含む）から算出が算出。

**熊本地震 高校生の活躍を知る  
パイプ椅子で作った「SOS」に支援物資届く**



**初期段階の  
避難所の様子を  
写真で確認**

**【想像力】【思考力】**

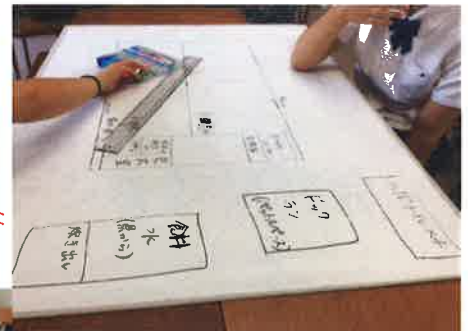
体育館の床に段ボールやブルーシートを敷いた状態で生活。どのような支援ができるかを考える。

避難所生活経験者のいるグループに、教師がさりげなく入る。



**安心・安全な  
避難所を  
デザインして  
みよう**

UD視点から、多様な避難者に対してどのような支援ができるかを考える。



避難してくる「多様な人々」への配慮についてグループで意見を出し合いながら、めざす避難所に近づける。

**【思考力・判断力・表現力】  
【主体的な学び】**

**避難してくる多様な人々（選択ケース）**

- ① 生後3カ月の乳児と20代の母親
- ② 喘息を持つ3歳児と30代の母親
- ③ 中学3年生の受験生と40代の母親
- ④ 小麦と卵アレルギーがある30代男性
- ⑤ 聴覚障がい（まったく聞こえない）のある40代女性
- ⑥ 視覚障がい（ほとんど見えない）のある50代男性
- ⑦ 日本語・英語が話せない、読み書きできない外国人
- ⑧ 車いす生活のため、近所の人と避難所に来た80代女性
- ⑨ 性的マイノリティ（LGBT）の人

**避難所デザインを発表・交流  
ークラスメートから学ぶー**




**【対話的学び】【深い学び】**



【深い学び】

## 7 高校生の感想

- LGBTの人のために、トイレをどちらの性別でも入れるようフリーにしたアイデアは、とても優しくて良いと思いました。
- 他のグループはすべての人のことを考えるとともに、長期間過ごすことのできる環境作りも考えた配置だったので、すばらしいと思いました。
- 災害が自分の地域で起きた時、今の自分なら地域のために何かできると思った。人と人の助け合いは凄いと思った。
- 自然災害で自分の家がなくなったり、家族がなくなったりと、悲しみをもって生活している人がいるという事を忘れず、自分にも起こりうる事だと思い、自分は今何が出来るか考え、行動できるようになりたい。

2019年1月29日印刷

### ライフデザインイノベーション研究会

代表 富田 道子（広島都市学園大学子ども教育学部）

事務局 小谷 教子（敬愛大学国際学部）

石垣 和恵（山形大学地域教育文化学部）

齋藤美保子（鹿児島大学教育学部）

植田 幸子（香川県私立英明高等学校）

鈴木 裕子（福島県立福島商業高等学校）

\* 本リーフレットは、防災教育チャレンジプランの助成金の一部を使用して作成したものです。